奄美の図書館事情

ー分館長・島尾敏雄と榮喜久元の業績からー

工藤　邦彦

要　旨

離島圏域における図書館活動の在り方を検討する一環として、1958（昭和33）年に開館した鹿児島県立図書館奄美分館を舞台に、分館長としてユニークな運営を遂行した島尾敏雄（しまお・としお）と榮喜久元（さかえ・きくもと）の業績から奄美の図書館事情を概観する。

キーワード：鹿児島県立図書館奄美分館、島尾敏雄、榮喜久元、参考調査図書館

1．はじめに

（1）奄美の概要

第二次世界大戦直後の奄美は、1946（昭和21）年2月2日の「連合国覚書宣言（二・二分離宣言）」以降、7年3か月の間、日本から分離した歴史を有す。すなわち、米軍政府の企図のもと、1946（昭和21）年10月3日の臨時北部南西諸島政庁開庁を皮切りに、1950（昭和25）年11月に奄美群島政府へ、1952年（昭和27）年4月以降は琉球政府発足、同年9月、奄美地方庁設置を受け那覇を拠点とする琉球政府下に置かれるなど、言わば行政基盤が翻弄された時代である。しかし、奄美群島民や島出身の本土居住者一丸となった粘り強い復帰に向けたパトリオティズム（愛郷心）の発揚によって1953（昭和28）年12月25日に日本復帰を果たし、鹿児島県大島支庁を開設、今日に至っている。

ゆえに奄美については、我が国の領土である有人離島のうち、群島の自立的発展並びに住民生活の安定及び福祉の向上を目的とした行政法である「奄美群島振興開発特別措置法」（1954（昭和29）年施行、制定当初の題名は「奄美群島復興特別措置法」）が存在し、戦後復興の源泉となっている。同法は、5年の時限立法ではあるが今日まで更新が続いており、税制上の優遇措置や自治体が行う関連の公共事業に係る補助率かさ上げ、予算確保など特別助成がなされている[1)]。

このような特異な政治・経済事情を背景に「沖縄本島を中心とする北は奄美群島から南は八重山諸島に至る南島一帯は、古来学界の宝庫として内外から深い関心をもたれた地域」[2)]の一角である奄美の公共図書館活動史を紐解くと、以下の3期に大別できる。

○【第1期】（1948 ～ 1954年）

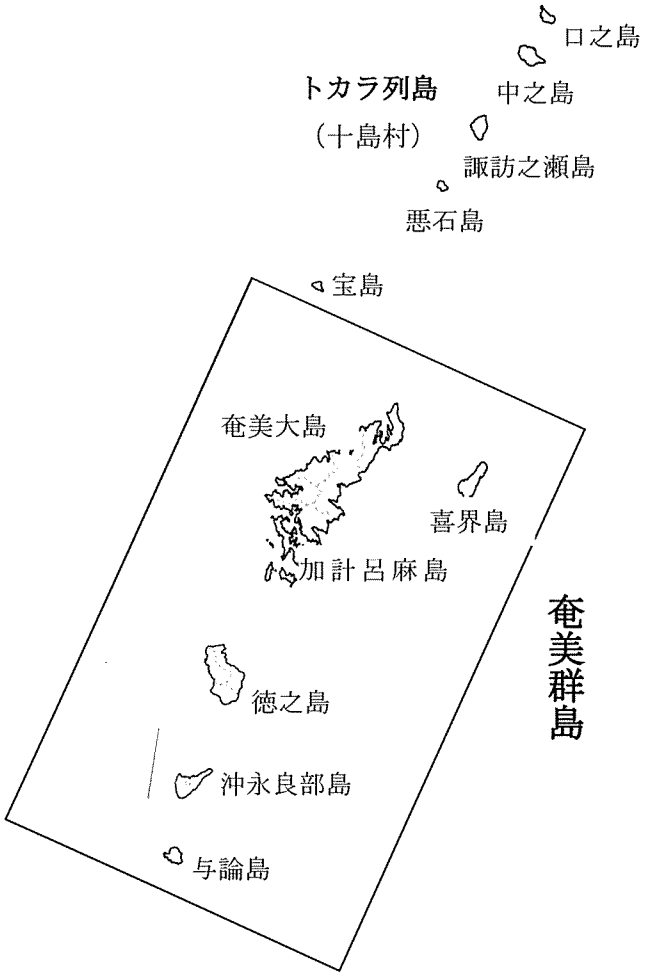
群島中心地である名瀬に1948（昭和23）年、奄美博物館図書室を起点とした奄美図書館が開設した。直後の1951（昭和26）年に米軍政府のもと、奄美群島政府文教部によるInformation Center設置に沿う大島文化情報会館が発足した。この二系統をもとに解消、改称、併設を経て奄美日米文化会館へと収斂した過渡的な図書館運営がなされた[3)]。

○【第2期】(1955 ～ 1981年)

1958（昭和33）年、奄美日米文化会館を併設のうえ、「鹿児島県立図書館設置条例の一部を改正する条例」に基づき、県立図書館奄美分館（以下、奄美分館）を開館した。開館を契機に戦後文学の中で第二次戦後派と位置づけられる作家・島尾敏雄（以下、島尾）や後継の榮喜久元（以下、榮）が分館長に就き、約25年間、多彩な図書館活動が展開された。

○【第3期】(1982年から現在に至る)

島尾、榮の退任後、両分館長が基盤を作った運営方法に倣い、「道之島」【図1】と言える沖永良部島、与論島、喜界島、徳之島、さらに大島南部の古仁屋に図書館が相次いで創設され、群島全域の図書館活動は活況を呈した。2008（平成20）年11月に奄美分館は閉館したが、翌2009（平成21）年4月に県立奄美図書館（以下、奄美図書館）として昇格、リニューアルを果たし今日に至っている。



【図1】 「道之島」奄美群島位置図

神谷裕司 2010 『奄美、もっと知りたい』増補版 p30をもとに作図。

（2）奄美の図書館のあゆみ：先行研究から

奄美図書館史の先行研究として、【第1期】の黎明期および【第2期】の島尾分館長就任時についての分析は、井谷（2007a 2007b 2015）、早野（2015）が挙げられる。なかでも井谷は、「道之島」と呼ばれる広域の奉仕地域を抱えつつ、充実した貸出文庫事業、読書推進活動、さらに島尾の得意とする奄美郷土研究会を主軸とした郷土資料の蒐集、整理全般について文化史的視点から考察した。

さらに【第 3 期】の離島圏域における図書館活動を披歴した論考には伊藤（1984）がある。伊藤は、自ら頻繁に「道之島」を渡り歩き、住民との図書館づくりに関与のうえ、特に沖永良部島の和泊町立図書館創設の経緯や当時の社会教育関係施設の現状と課題について、その実践成果をもって提言を纏めた[4]。当時、伊藤は「大島郡には、県立図書館のほか、与論町、喜界町、知名町、和泊町と四町立図書館が活動している。多くは県内でもトップレベルのサービス実績をあげており、（中略）これだけの意味のある文化先進地の形成は県本土では見当たらない」[5] と礼賛している。加えて、徳之島町や喜界町の公立図書館や学校図書館における児童生徒の読書環境を実態調査した種村（2003a 2003b）、自ら勤務する喜界町図書館の奉仕状況を検証した得本（1987a 1987b 1988）の論考がある。本稿で【第 3 期】と位置づけた奄美群島における公立図書館創設の状況は【表 1】のとおりである。

【表 1】奄美群島　図書館創設のあゆみ　（西暦は開館年）

1980 年	伊藤松彦や町民の働きかけで沖永良部島 和泊町立図書館開館
1984 年	与論町立図書館が一般会計予算の 10%を計上のうえ、開館（貸出し無制限）
1985 年	実業家・長島公佑氏が故郷に資金援助・寄贈の喜界町図書館開館
1990 年	沖永良部島 知名町立図書館開館
1992 年	徳之島 天城町立図書館開館
1994 年	奄美大島南部古仁屋に瀬戸内町立図書館開館（島尾文学コーナー併設）
2004 年	徳之島町立図書館、生涯学習センター内に開館
2009 年	県立図書館奄美分館が県立奄美図書館として移転開館（島尾敏雄記念室併設）

得本拓 2013. 奄美の図書館、30 年のあゆみ：マレビト伊藤松彦先生と歩く．みんなの図書館 2013.5　p41 から作表。

奄美の図書館を概観するうえでは、創設の源となった島尾の業績を確認するとともに、与論町立図書館の創設にも関わった榮の仕事も併せてみていく必要がある。本稿では、【第 2 期】に絞り、島尾と榮の業績を現地での文献調査の結果[6] から検討していく。

2．名瀬居住時代の島尾

先ずは島尾の生涯を確認していく。島尾は 1917（大正 6）年に神奈川県横浜市で 6 人兄弟の長男として誕生した。幼少期から克明に日記をつけるなど、文才に秀でていた。1943 年（昭和 18）年に九州帝国大学を繰り上げ卒業し、第三期海軍予備学生となる。1944（昭和 19）年 11 月、第十八震洋隊長となり、加計呂麻島の呑之浦に駐屯し、出撃を待ったが、

命令を待つうちに終戦を迎えた。その間、島の押角集落の国民学校代用教員の大平ミホ[7]と恋仲となり、戦後 1946（昭和 21）年、島尾の父親が待つ神戸で結婚、教師として生計をなす。上京後、幼い二人の子どもを抱えつつ、ミホ夫人の心因性神経症が深刻さを増し、その転地治療のため、1955（昭和 30）年 10 月、名瀬市に移住し 1958 年（昭和 33）年 4 月、奄美分館長に就任した。以後の約 17 年間、分館長と文筆活動との二足の草鞋を履いたが、1975 年（昭和 50）年 4 月分館長を退任し、奄美を離れ住処を転々とした後、1986 年（昭和 61）年 11 月 12 日、出血性脳梗塞のため、鹿児島市内で急逝、69 歳の生涯を閉じた。名瀬居住時における島尾の略年譜を以下に示す【表 2】。

【表 2】 名瀬居住時代の島尾 略年譜

西暦	元号	年齢	事　　柄
1955	昭和 30	38	10 月、名瀬市住吉町に移住。
1956	昭和 31	39	4 月、鹿児島県立大島高等学校、大島実業高等学校定時制の非常勤講師（日本史、国語担当）となる。9 月、「夢の中での日常」を刊行。 12 月、名瀬の聖心教会でカトリックの洗礼を受ける。
1957	昭和 32	40	5 月、「名瀬だより」を「新日本文学」に連載(昭和 34 年 1 月まで)。 12 月、奄美日米文化会館館長に就任。
1958	昭和 33	41	1 月、「奄美郷土研究会」を組織。 3 月、県立大島高等学校退職。 4 月、県立図書館奄美分館が開設、初代分館長に就任。 7～8 月、 熊本商科大学で司書講習を受講。
1959	昭和 34	42	3 月、県立大島実業高校退職。
1960	昭和 35	43	十二指腸潰瘍で療養中にもかかわらず執筆活動を続ける。 10 月、「死の棘」を刊行。
1961	昭和 36	44	3 月、「死の棘」により第 11 回芸術選奨を受賞。 7 月、「島尾敏雄作品集」（全 5 巻）を刊行。
1963	昭和 38	46	4～6 月、米国国務省の招待で、米国、プエルトリコ等訪問。
1964	昭和 39	47	2 月、「出発は遂に訪れず」を刊行。 9 月、鹿児島県図書館協会奄美支部結成。 11 月、第 15 回南日本文化賞を受賞。
1965	昭和 40	48	9～10 月、モスクワでの日ソ文学シンポジウムに参加。 10 月、「日のちぢまり」を刊行。 名瀬市小俣町に転居。
1966	昭和 41	49	7 月、「島にて」を刊行。 11 月、第 25 回西日本文化賞を受賞
1967	昭和 42	50	7 月、「読書会」結成。 10～12 月、ソビエト、東欧諸国を単独旅行。
1969	昭和 44	52	2 月、「琉球弧の視点から」を刊行。自転車事故で長期入院。
1970	昭和 45	53	11～12 月、ニューデリーで開催のアジア・アフリカ作家会議に参加。
1972	昭和 47	55	6 月、「日の移ろい」を「海」に連載（昭和 51 年 9 月まで）。 10 月、「硝子障子のシルエット」で第 26 回毎日出版文化賞受賞。 11 月、第 1 回南海文化賞を受賞。
1974	昭和 49	57	7 月、妻ミホ「海辺の生と死」を刊行、第 15 回田村俊子賞を受賞。
1975	昭和 50	58	4 月、奄美分館長退任、名瀬市小俣町から指宿市西方に転居。 鹿児島純心女子短期大学教授、図書館長就任。

第 6 回島尾敏雄記念室講演会（2014. 10. 26 鹿児島県立奄美図書館）配布資料（略年譜）、「島尾敏雄展」（2011. 11 かごしま近代文学館 開催）展示会資料別紙年譜をもとに加筆、修正。

次章では、名瀬に居住するなかで培った“分館長としての島尾、榮”について、その業績を見ていく。

３．分館長・島尾と榮の業績

（1）司書としての島尾

島尾敏雄（初代分館長在任期間）1958(昭和33)年4月1日～1975(昭和50)年3月31日

島尾が分館長在任中に図書館利用者や各種文化団体との関わりのなかで確立した主な事業を以下、列挙する。具体的には、奄美郷土研究会の再興、奄美群島内に出張所を設置し職員が巡回した群島全域への配本システムである貸出文庫の立ち上げ、久保田彦穂（児童文学者・筆名：椋鳩十）鹿児島県立図書館長肝いりの読書推進活動である『母と子の20分間読書』、読書会『島にて』、青嶺短歌会の発足と多彩である。なかでも奄美郷土研究会の学究活動から日本を太平洋の中の島嶼群である琉球弧を軸とした“ヤポネシア論”の展開による“司書としての島尾”が最も色濃い。そのなかでの業績については、奄美群島を基軸とした“郷土資料コレクションの創成”を第一義に挙げたい。

具体的な奄美分館におけるコレクション創成の成果は、構築した郷土資料群を初めて披歴した1961（昭和36）年の『鹿児島県立図書館奄美分館郷土資料分類目録』、次いで、1969（昭和44）年の『鹿児島県立図書館奄美分館郷土資料目録』の刊行である。これは奄美群島における参考調査図書館[8]の役割をも担っていたことがうかがえる成果物といえる。

奄美分館所蔵のコレクションを活用したと思われる郷土史家の弓削政己は、誌上対談『特集島尾敏雄：討議・離島の不幸、離島の幸福、奄美の現在』（「ユリイカ」1998年8月号掲載）で「島尾さんは奄美の歴史資料をずっと集めており、分館に貴重な資料をたくさん残されています。例えば私は、明治前・中期の黒糖の自由売買の論文を発表していますが、明治20年代の商人と島民の裁判闘争記録が五点あり、これは島尾さんが神田の古書店で買い集められたものです。そういう基礎資料を集められた功績は想像以上に大きいものです。」と島尾への謝辞とともに「現在の図書館は島尾さんの時代に比べて資料収集にあまり熱心でないのが残念です」と苦言も呈している[9]。

島尾の史学者としての目利きがあってこそ、奄美分館におけるコレクション整備が図られたといえよう。さらに収集した資・史料群のうち、貴書資料に選定した現物については、利用者への便宜を図るため、1972（昭和47）年3月に「近世郷土資料復刻事業」を立ち上げ複製資料として刊行のうえ、今日に至っている。

（2）島尾を継いだ榮

榮喜久元（2代分館長在任期間）1975(昭和50)年4月1日～1981(昭和56)年7月22日

次いで、島尾が分館長退任後の草創期を支えたのが、榮喜久元（さかえ・きくもと）である。榮は、1923（大正12）年、奄美群島の与論島で生まれた。1944（昭和19）年に鹿児島青年師範学校を卒業、鹿児島県立根占高校、宮之城高校教諭として勤務ののち、鹿児島

県教育委員会社会教育主事、文化係長、県立図書館館内奉仕課長を歴任し、1975（昭和50）年4月1日、奄美分館長に就いた。1981（昭和56）年7月22日まで分館長を務めた後、翌23日付けで鹿児島県立図書館副館長に転じた。後に1983（昭和58）年4月、県を退職した。榮は民俗研究家として、図書館勤務の利を活かし分館長補佐・心得として長年運営を担った當田真延（とうだ・みちのぶ）と共同執筆にて国書刊行会のセット物である『写真集明治大正昭和名瀬：ふるさとの想い出』（1980（昭和55）年刊行）を纏めた。さらには分館長時代に執筆した草稿をもとに2003（平成15）年11月『蘇鉄のすべて』（南方新社）を刊行するなど、奄美群島全域の民俗全般に関わる多くの著作を世に送り出した。

以上が榮の著作に関する業績だが、参考調査図書館構築の基盤となった業績に“奄美群島日本復帰資料整備”がある。整備の経緯は2003（平成15）年10月、奄美分館臨時職員の間弘志（はざま・ひろし）が中心となって編纂した『書庫の息吹き：奄美群島日本復帰50周年記念：奄美分館所蔵日本復帰関係図書目録』の前書きに詳しく記されている。また、奄美分館の閉架書庫には『奄美群島日本復帰資料目録』と名付けた1978（昭和53）年写の僅か2頁の直筆メモが存在する。メモには、復帰運動に使用された鉢巻、腕章、横断幕など博物資料27種70点が掲載されている。間に拠れば、同年より島尾分館長時代に未整備のまま書庫に保存された資料を黒表紙で装備する作業が行われたという。この作業をはじめ、榮による目録整備の着手が後年、奄美日本復帰周年記念事業の一助ともなった。

【表3】 奄美分館 図書館事業の概要

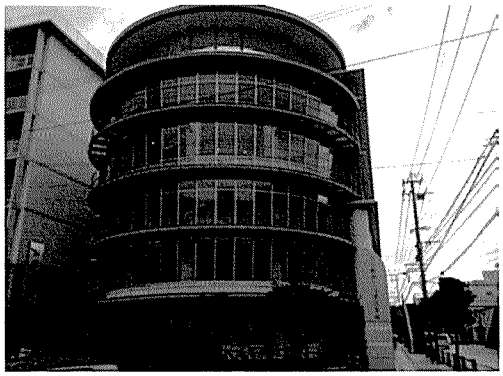
事　項	事　業　概　要
館内奉仕	・調査・研究に資するために参考資料、郷土資料、琉球弧資料の充実を図る。 ・地元紙のマイクロフィルム化を行う。 ・県立奄美図書館の開館に向けて、郷土資料の充実を図る。
地方奉仕	・貸出文庫の配本・回収に際しては、各町図書館・各市町村公民館図書室・学校図書館の運営・実務に対する助言・支援に努め、読書指導等の相談に積極的に応じる。 ・地域における親子読書、各種読書団体、文化団体等の育成に努める。 ・県図書館協会奄美支部と連携・協力し、「ネリヤカナヤ創作童話コンクール」の開催を支援する。
研究会等	・読書活動の推進を図るために「ふれあい読書フェスタ」の開催を支援する。
広報活動	・史料の保存を図り、郷土研究に役立てるため「奄美の史料」を複製する。 ・図書館に関する情報を提供し、利用を図るために、「分館要覧」、分館報「島の根」、「奄美分館だより」を発行する。

※　奄美分館2007『平成18年度 分館要覧』p6から転載・抜粋

以上、両分館長の業績からは、分館長としての館務統轄も相まって奄美分館においてある一定のレベルの“参考調査図書館の構築”がなされたといえる。以降、「調査・研究に資するために参考資料、郷土資料、琉球弧資料の充実を図ること」、「史料の保存を図り、郷土研究に役立てるため「奄美の史料」を複製すること」【表3：表内下線部】の二点が提示されていることからも、島尾と榮の業績が確実に引き継がれていたことがわかる。

4．おわりに：奄美図書館の現状

2009（平成21）年4月23日、奄美分館から奄美図書館が新築移転のうえ、開館した【写真1】。新たな奄美群島の中核図書館たるべき基本方針として、①群島民への読書サービスと12市町村の図書館・公民館図書室への支援、②島尾の文学や民俗学に関する情報発信【写真2】、③生涯学習の振興、④奄美の自然や歴史・民俗、郷土の先人、日本復帰運動等の貴重な郷土資料の収集・公開を掲げている[10]。特に②については、奄美の図書館ならではの島尾忌（命日の11月12日）に合わせ“島尾先生の図書館”を顕彰した特別展示、講演会を開催している。さらに、分館の継承事業と位置づけられる資料刊行及び広報活動には、①奄美の史料を複製、②「奄美図書館要覧」の刊行、③「島の根」の刊行、④「奄美図書館だより」（毎月）の発行、⑤あまみエフエムへの情報提供、⑥ホームページによる情報発信が挙げられる[11]。



【写真1(左)鹿児島県立奄美図書館全景、写真2（右）館内設置の「島尾敏雄記念室」入口】

今後は、“奄美群島日本復帰資料整備”を目的とした整理、保存業務を対象に、奄美市立奄美博物館との資・史料の移管といったMLA連携の動向を明らかにしたうえで、参考調査図書館を支えた特色ある蔵書群を対象としたテクニカルサービスの実態を紐解いていく。

謝辞

現地調査に際しては、新宮領道郎鹿児島県立奄美図書館長、石本晃治指導主事、ならびに元鹿児島県立図書館資料課長の萩原富士郎氏より内部資料提示、御教示を頂いた。深謝の意を申し上げる。

<註>

1) 国土交通省国土政策局離島振興課「離島の現状」平成 24 年 10 月現在

2) 奄美日米文化会館 1955『文化會館の栞：昭和 30 年 5 月』p1

3) 奄美名瀬の図書館は、解消、発足、改称、併設という複雑な変遷を抱えるなど本土には無いハンディを克服のうえ、現在に至ったことがわかる（『鹿児島県立図書館奄美分館閉館記念誌』(2009) p23)。

4) 伊藤松彦 1984『農村の暮らしと学習・情報要求：和泊町（奄美群島）図書館社会調査報告』、『離島圏域における図書館活動のあり方について』両著とも日本図書館協会刊

5) 伊藤松彦「南点」(南日本新聞 1992 年 1 月 7 日記事)、伊藤松彦 1997『鹿児島の図書館：内と外』p10－11

6) 島尾と榮の業績を精査するにあたり、両者が勤務した奄美分館の後継である奄美図書館内の閉架書庫において発刊物等の文献調査を行った。具体的な調査時期および書庫調査の折に訪問した図書館等は以下のとおりである。

・第 1 回調査　2014 年 10 月 26 日～27 日（鹿児島県立奄美図書館内島尾敏雄記念室収蔵資料調査、旧奄美分館・館長公舎訪問）

・第 2 回調査　2015 年 1 月 27 日～29 日（鹿児島県立奄美図書館、県立奄美高校図書室、大島郡瀬戸内町立図書館（古仁屋地区）島尾文学コーナー収蔵資料調査）

・第 3 回調査　2015 年 11 月 14 日～16 日（鹿児島県立奄美図書館郷土資料コーナー架蔵分調査、加計呂麻島（大島郡呑ノ浦地区）島尾文学碑・墓碑訪問）

7) ミホは 1919（大正 8）年、奄美大島大和村のノロの家系である長田家の長女として出生。実母の死後、押角の実業家であった大平文一郎の養子となる[比嘉加津夫（2012）]。文一郎は漢文を嗜み、島尾は大平宅にある文一郎の蔵書を閲覧することをきっかけにミホと縁を深めることとなった。

8) 主として調査、研究に役立つ資料からなるコレクションを形成し、レファレンスサービスを行う専門職員を配置している図書館ないし図書館の一部門を指す[日本図書館情報学会編 2013.『図書館情報学用語辞典』第 4 版 p87]。

9) 越間誠、佐竹京子、前利潔、弓削政己 1998「特集島尾敏雄：討議・離島の不幸、離島の幸福、奄美の現在」ユリイカ　No. 407 p240

10) FM ラジオあまみエフエム「ディ！ウェイブ」放送原稿（2014（平成 26）年 8 月 22 日放送分）

11) 鹿児島県立奄美図書館 2015.「平成 27 年度要覧」p10

<参考及び引用文献>

島尾敏雄 1965. 図書館のあゆみ. 鹿児島県教育委員会編『戦後の奄美の教育：祖国復帰 10 周年記念誌』142－147. 鹿児島県教育庁大島教育事務局.

鹿児島県立図書館奄美分館 1966, 1968.『島の根：鹿児島県立図書館奄美分館報』No.1, No.4

得本拓 1987a. 南の島から（連載・まちやむらの図書館 27）. みんなの図書館 121：58－61

得本拓 1987b. 基本を再確認、利用者に応えたい：鹿児島・喜界町図書館（シリーズ・今、町や村の図書館は 1）. 図書館雑誌 Vol.81 No.12：725

得本拓 1988. 生活の中の図書館を：喜界町図書館 46 カ月の歩み（第 10 回奄美地区読書普及研究会・事例発表 1）. 島の根 鹿児島県立図書館奄美分館報：18－21

伊藤松彦 1989. 2. 離島図書館サービスの現況. 図書館と島づくりを考える 特集離島にこそ図書館を：図書館づくりの課題と展望. しま No. 139：13

鹿児島県立図書館 1990. 『鹿児島県立図書館史』

名瀬市教育委員会 1993. 『戦後の奄美教育誌：復帰 40 周年記念』

越間誠、佐竹京子、前利潔、弓削政己 1998. 特集島尾敏雄：討議・離島の不幸、離島の幸福、奄美の現在. ユリイカ No. 407 ：238－247

西日本図書館学会 2000. 『九州図書館史』千年書房.

島尾ミホ、志村有弘 2000. 『島尾敏雄事典』勉誠出版.

間弘志 2003. 『全記録分離期軍政下時代の奄美復帰運動・文化運動』南方新社.

種村エイ子 2003a. 徳之島の図書館と子どもの読書環境. 南日本文化 第 35 号：65－90

種村エイ子 2003b. 地域社会における公立図書館の役割その 2：喜界町図書館の調査にもとづいて. 鹿児島国際大学短期大学部研究紀要 第 72 号：41－69

藤井令一 2004. 島尾敏雄のみた奄美. 松本泰丈・田畑千秋編『奄美復帰 50 年：ヤマトとナハのはざまで』（現代のエスプリ別冊）91－100. 至文堂.

求哲次 2006. 奄美分館長の仕事. 奄美・島尾敏雄研究会編『追想・島尾敏雄』172－175. 南方新社.

井谷泰彦 2007a. 奄美の図書館長 島尾敏雄：図書館文化論の視点から. 政治学論集 第 25 号：45－61

井谷泰彦 2007b.「道の島」に本を担いで：奄美の図書館長・島尾敏雄. 日本図書館文化史研究会編『図書館人物伝：図書館を育てた 20 人の功績と生涯』211－232. 日外アソシエーツ.

鹿児島県立図書館奄美分館 2009.『鹿児島県立図書館奄美分館閉館記念誌』

神谷裕司 2010. 『奄美、もっと知りたい』増補版 南方新社.

比嘉加津夫 2012. 『島尾敏雄を読む：『死の棘』と『死の棘日記』を検証する』 ボーダーインク.

得本拓 2013. 奄美の図書館、30 年のあゆみ：マレビト伊藤松彦先生と歩く. みんなの図書館 2013 年 5 月号：38－42

井谷泰彦 2015. ヤポネシアと図書館長：南島における島尾敏雄の一断面. 島尾伸三、志村有弘編『島尾敏雄とミホ 沖縄・九州』185－193. 鼎書房

早野喜久江 2015. 作家活動と図書館運営：奄美大島における島尾敏雄の場合. 島尾伸三、志村有弘編『島尾敏雄とミホ 沖縄・九州』173－184. 鼎書房

鹿児島県立奄美図書館 2015. 『平成 27 年度 要覧』

工藤邦彦 2015. 奄美大島名瀬（ナセ）における図書館運営の特質：“島尾イズム”（島尾敏雄）の継承を中心として. 図書館学 No.107：32－43

（くどう・くにひこ 別府大学）